国際演劇交流セミナー 2017-2018

International Theater Exchange Seminar 2017-2018

ごあいさつ

一般社団法人日本演出者協会 理事長
流山児祥

日本演出者協会の国際演劇交流セミナーが始まって今年で 20 年の節目の年を迎えることになりました、関係各位に厚く御礼申し上げます。1999 年から文化庁の本格助成も始まって協会国際部は世界各国の演劇人と出会いワークショップ、レクチャー、シンポジウム、リーディングなどを行う国際演劇交流セミナーを 20 年に渉って企画開催してきました。世界には、豊かで多様な演劇が存在することを学び、共有しあうことは演劇の根本である《他者》との出会いです。国際演劇交流セミナーは、日本演劇が思考してきている所謂、明治以降の近代劇＝欧米中心の思考をドラスティックに変え、演劇を必要とする世界各地の現代演劇のもう一方の豊かさ（オルタナティブ）を体験する旅でした。

2015 年には韓国、パレスチナ、オーストラリア、デンマーク、メキシコ、2016 年にはアフガニスタン、マカオ、ウエールズ、といった地域の特集。勿論、ロシア、フランス、イギリスといった国の演劇人との交流も同時に行っています。2017 年、2018 年の本合併号には韓国、フランス、台湾、アルゼンチン、スイス、デンマークとの試みの特集が掲載されています。わたしも参加したインドネシア、台湾、韓国の特集は貴重で面白い体験でした。わたしはインドネシアには 2 度公演してインドネシア演劇が如何に社会に、地域に根差しているか、その身体表現の豊かさの根源を共にワークショップすることで再確認しました。韓国演劇のトップシーンを牽引している劇作・演出家：パク・クニョン氏の独自のワークショップは日本の若手演出家にとって目から鱗のプレゼントになりました。今、韓国と並び最も芸術に力を入れている台湾のトップ・リーダー：汪兆謙氏のドキュメント演劇も多くの参加者を集め好評でした。また、アルゼンチンのエミリオ・ガルシア・ウエービ氏の「既成概念を揺るがす演出を～その創造のプロセスとは何か～」は京都と東京の 2 か所で各 6 日間開催し多くの参加者がアルゼンチンの鬼才と衝撃的な実験を重ねました。舞台芸術は既成概念の破壊とその後の創造の果てにあるのです。

世界中の地域の演劇人、演出家と出会い彼らが彼の地で実践している演劇の多様性を学び共有し、共に実験して、社会に向けて普及のための公演を行うことで日本の演劇人、とりわけ若い世代の演出家を育

成する事業が国際演劇交流セミナーです。演劇の持つ真の自由さを獲得し、社会という《他者》のために文化芸術は存在します。地球上、それぞれの場所の必要性から生まれる演劇の多様性を重視することはわたしたちの課題です。いま、世界はネオ・ナショナリズムとポピュリズムの波に翻弄されています。日本の若者たちは「私はダメだ」「俺はクズだ」と思う人が米・中・韓と比べて突出しているという検査結果が出ています。スマホとインターネットの谷間に「わたし」という「個」が孤立し彷徨う 2019 年の現在です。まもなく、改元。日本を変えたあの 3・11 東日本大震災から 8 年です。3・11 を忘却の彼方に押しやるのではなく、忘却の痕跡を自らの身体に刻むのがわたしたち表現者（当事者）の仕事です。2015 年、東京と福島で開催したパレスチナ特集で来日したイエスシアターと福島の演劇人の交流は今も続いています。演出家：イハッブ氏は「文化なしの闘争はない、社会にとって演劇は必要不可欠だと想える若い世代を育てたい」語った言葉は今も生き続けています。この想いがこの事業の根本です。

2020 年代をどんな時代にしたいのか？　が演劇人に問われています。少子高齢化の超格差時代到来が予測される時代、わたしたちは決してネオ・ナショナリズムやポピュリズムに屈することなく国境を越え世界の演劇人たちとともに歩んで行きます。

また、企画の具体化にあたっては、多くの研究者、翻訳家、評論家、関係各国の大使館、国際交流基金などにご尽力いただいていることに感謝、そして何よりも文化庁のサポートに厚く御礼申し上げます。そして、何よりも、この年鑑が多くの若い演劇人に読まれることを切に願っています。

（2019 年 3 月 5 日）

韓　国　特　集

【INTRODUCTION】

「パク・クニョン　演出ワークショップ　5日間」
～ 嵐のワークショップ、関西再上陸決定！～

企　画　：　島守辰明

パク・クニョン演出ワークショップ5日間

昨年度、劇団未来アトリエでのワークショップは、関西演劇人を中心に東京などからの参加者を含めて盛況のうちに終わった。

パク氏と関西人との相性の良さを感じたことに加えて、パク氏自身の俳優へのアプローチには日本の演劇人、特に演出家には多大な影響を与えると強く感じた。日本にまだ確立されていない演出の基礎。パク氏が韓国演劇大学で学んでいないにも拘らずスタニスラフスキー・システムを基本にした演出の基礎を踏襲していることが、何よりも信頼するところだった。そこで昨年に引き続き再度パク・クニョン氏をお迎えして、今回は「演出」に特化した「演出ワークショップ 5 日間」を開催した。

今回は当初から、パク氏に「日本の若い演出家のためのプログラムを組めないか」とご相談していた。会場であり今回ワークショップ共催でもある兵庫県立ピッコロシアターには筆者も担当する演劇学校、舞台技術学校があることから、経験の浅い層から経験豊富な層まで幅広く参加者を募集した。

テクストはパク・クニョン作『そんなに驚くな』。父が自殺したある家族の、不条理でヒリヒリと痛くも可笑しいドラマである。

パク氏からは当初から以下の概要を挙げていただいていた。

1. 演出家としての能力と心得などの論理
2. 俳優と演出家の関係
3. 真の演出とは何か
4. テクストを使った演出実習
5. 短い公演の発表

参加者はグループに分かれてそれぞれに、台本にはない場面を創り上げる、ここまでは昨年通りだが、加えてリーダーである演出と俳優、その各段階での発想、俳優をいかに自由するか、自身のテーマと空間、道具の構成など、演出未経験者、経験者を含めて対象に、という難題に対して、パク氏は真摯に、しかもポイントをわかりやすく、実践的に、上記５項目を明確に示してくださった。参加者全員、ときには見学者、また協会員担当者も含めて意見を出し合った。パク氏の具体的で研ぎ澄まされたサジェッションは、「教えられている」という圧力を参加者が感じることもなく、いつのまにか基礎を理解してしまう。氏の明快な説得力、明快だからこその深い問題提議によるものであり、韓国の大学で教えている実績が垣間見られるものだった。

また今回ワークショップ中に関西では台風や地震などの天災が立て続けに発生した。ワークショップ中にも大型台風が通過し、交通手段がすべて止まることから、やむなく 1 日のみ、中止することになってしまった。ピッコロシアターの好意により、土曜日と日曜日を朝から解放していただくことで、時間を埋め合わせることができた。こうした天災による不都合が起きた場合の今後の対策を考えることも、短期間のワークショップを開催する一考に加えなければならないと考える。

今回は演出に特化することで、今後の演劇ワークショップを開催する意義を改めて実感させる稀な機会となった。演劇教育が進んでいる韓国の演劇人との交流は今後も重要になると考えられる。

【 in 兵　庫 】　　会　場　：　兵庫県立ピッコロシアター　中ホール

2017 年に大好評を博したパク・クニョン氏ワークショップが、装いも新たに再上陸！　今回は「演出ワークショップ」。韓国国立演劇大学でも教鞭を執り、上演されるたびに 韓国演劇界に衝撃を与え続けるパク・クニョン氏を招いて、日本の演劇人、演劇を志す人たちの ために演出ワークショップを開催しました。

【ワークショップ概要】

1. 演出家としての能力と心得などの論理
2. 俳優と演出家の関係
3. 真の演出とは何か？
4. テクストを使った演出実習
5. 短い公演の発表

※　使用台本『そんなに驚くな』（パク・クニョン作 石川樹里・翻訳）

【ワークショップ】

■ 8 月 22 日（水）～　24 日（金）18：30 ～ 20：45

■ 8 月 25 日（土）・　26 日（日）13：00 ～ 20：45

（※ 8 月 23 日（木）ワークショップは台風接近により中止となった。）

通訳　洪 明花

担当　島守辰明　金子順子　山本つづみ　井之上淳

パク・クニョン / 박근형 / 朴根亨 / PARK KUN HYUNG

1963 年 8 月 11 日、ソウル生まれ。劇作家・演出家。劇団コルモッキル芸術監督。韓国芸術総合学校演劇院演出科 教授。正規の演劇教育、文学の授業を受けずに劇団に入団し、現場の直接経験を積む。1985 年、劇団 76 団に俳優として入団、その後演出家、劇作家に転向。

2003 年、劇団コルモッキルを旗揚げ。以来、韓国を代表する劇作家・演出家として劇団内外にて幅広く活躍。 1999 年に初演した『青春礼讃』で韓国内の演劇各賞を総なめにする。公演の客席最後列では有名映画監督たち（イム・スルレ、ポン・ジュノ、キム・ジウン、パク・チャヌクなど）がひそかに観劇し、パク・ヘイル、コ・スヒ、ユン・ジェムン、オム・ヒョソクなど魅力的な俳優陣は彼らの映画で次々と重要な役を演じる。代表作に『鼠』『青春礼讃』『代代孫孫』『キョンスク・キョンスクの父』『そんなに驚くな』『満州戦線』『哀れ、兵士』など、話題作につぐ話題作を制作。日本でもタイニイアリス、上野ストアハウス、青森県立美術館、池袋あうるすぽっと（フェスティバル・トーキョー）等で公演を行っている。日本の戯曲も上演、『ヒッキー・ソトニデテミターノ』（岩井秀人作）、韓国版『眠れない夜なんてない』（平田オリザ作）。現代、韓国演劇界のトップランナー。

【 THE TEXT 】

ワークショップ１日目
8 月 22 日（水）18：00～20：45

○ **パ　ク**　たくさんの方に来て頂いて、緊張しています。毎日私と会っていたらすぐに分かると思いますが、私はあちこち足りない点があります。至らない点は大らかな気持ちで受け止めて頂ければと思います。

韓国の自分の劇団で作品を作る時は、よく遊ぶんです。"ＭＴ" っていう合宿に行くんですけど、日本ではないですよね。みんなでどこかに行って、みんなでご飯も食べて、そこで遊ぶということが必ずあります。私の劇団は稽古よりもＭＴによく行くので、ＭＴ劇団と呼ばれています。先程（実行委員の）島守さんが台風の接近を心配されていましたが、韓国でも 6～7 年前、ソウルに台風が直撃するといわれ、避けなきゃねと言いつつ結局来なかったんですが、「来る、来る」と言いながらＭＴで過ごしました。（日本語で）スミマセン。

改めまして、私はソウルで演劇、演出を主にやっているパク・クニョンといいます。実は正直に言って、このように WS をやるということは韓国では１回もなかったのですが、このように日本で開かせていただくことができました。私は、演劇というのを体系的に学んだことはありません。若い頃に演劇に興味があって、先輩たちがチラシを貼ったり、稽古をしたり、先輩たちの背中越しにその世界を見て、「ああ、こういう世界で自分もやっていけたらいいなぁ」と思っていました。

こういう話は最終日にゆっくりお話ししたいと思っていますが、まず私が一番大切だと思っているのは"観客"です。今この場には演出の方もいらっしゃって、演出・俳優兼の方もいらっしゃいますし、（戯曲を）書かれる方もいらっしゃいますけど、すべては観客のために創られていくものだと思っています。

もうひとつ大切なのは“リアリティ”だと思っています。リアリズムとは別ですよね。舞台の上で、俳優たちがリアリティをもって何かを行為する姿を見て、自分自身もそうですし、観客もそこで同じものを感じ取ることができると思っています。

ですが、一番大切なのは「一生懸命である」ことだと思います。上手にするということよりも、やはり観客が観ていて「一生懸命やっているな」ということを感じ取ることによって、上手下手ではなく、まず観客はそれだけで失望しないと思っています。上手にというのは、回数を重

ねていればそのうちなるものだと思います。それよりもやはり、上手いからと手を抜くのではなく、できなくても一生懸命やっている姿というものに、観客は心から喜んで拍手を贈ることができると思っています。こういう話は最後の日に、ここにはたぶん私よりも演劇の世界に長くいる方もいらっしゃると思うんですよね。そういった方も含め皆さんで、そういった話を分かち合うことができればな、と思っています。

これから 5 日間、皆さんとご一緒させて頂きますが、今回、テクストとして『あんまり驚くな』という作品を皆さんにお渡ししています。読まれました？　これは、変な地方の人たちの話です。2010 年に、東京で平田オリザさんがやっているアゴラ劇場で上演をしました。7 月にアゴラ劇場、その後、鳥取県の鳥の劇場でも公演しました。ご存知かもしれませんが BeSeTo 演劇祭がありますね。北京（Beijing）・ソウル（Seoul）・東京（Tokyo）の 3 都市をあわせて BeSeTo です。それぞれの国を廻って上演をする、そのときも公演しました。

テクストはお渡ししていますが、あくまでも参考だと思ってください。この中に 5 名の登場人物が出てきますが、進め方としては、もちろんこの 5 名が出てきてもいいし、その周りにまつわる、登場しないけれどもいるであろう人物を皆さんが創ってくれてもいい。いろんなパターンがあると思います。例えば、台本には出てきませんが、お父さんがお葬式に行って、自分の奥さんが別の男の人と結婚している話の「奥さん」を皆さんが描いてくれてもいいし、映画監督の長男がいますが、その映画仲間の物語を皆さんが創ってくれてもいいでしょう。兄嫁がカラオケ喫茶で働いていますが、そこのスタッフの話でもよければ、お客さんの話でもいい。進め方としては、そういう形で皆さんに創ってもらいます。

今、演出を希望されている方が 7 名いるとのことですが、（名簿を見ながら）この後、皆さんにチームを作ってもらいます。今 31 名いて、男性が 9 名、女性が 22 名。その中で演出だけを専門にされる方がいます。チームの中には必ず演出が入って頂いて、男性 2 名、女性が 6 名ほど、5 つのグループを作ります。それで、最終的に発表としては、10 分くらいの作品を創ってもらうということにします。お聞きしたのは、（会場を見て）照明もあるし、平台もあるんですね。

○　**島　守**　あります。

○　**パ　ク**　発表をどうするかは、WS を進行しながら、皆さんが機材関連を使いたいならそのようにしたいと思います。このままでよいというならこのままで。それは土曜日 くらいに決めましょう。

　先ほどの MT の話に戻ります。15 年くらい前に日本の俳優さんたちと東京で作品を創ったのですが、やはり「MT は知らない」、「なぜいちいち行かなければならないの？」と言われました。ですが、私の考えとしては、作品を創るにはまずは仲良くなる、一緒に遊ばなきゃいけない。「なんで遊ぶの？」と言った人もいました。だからこう言いました。「演劇やるのって、"どうやって世の中を遊んで生きるか "ってことのためにやっているのであって、演劇のために演劇をやってどうするんだよ」と。結局そのときは、車を借りて富士山に行きました。自殺願望のあった作家って誰でしたっけ？

○　**スタッフ**　太宰治。

○　**パ　ク**　そうです。太宰治が執筆をしていた場所（山梨県御坂峠にある「天下茶屋」）に行ったんですが、この座組は時間がないので行けませんね。台風の中で行くのもひとつなんですが、皆さんが早く知り合ってもらうために自己紹介タイムにしたいと思います。2～3 分くらいで、普通の話というよりは、「私はこんな人です」とか「こんなことをやっています」といったことをお話ししてもらえればと思います。その後でチーム分けを行います。大丈夫ですか？　それで。では、椅子を持って丸く円を描く型で座りましょう。

■全員で椅子を持ち円形を作る。

○　**パ　ク**　（円の中心に入り）では、私から始めます。私が芝居を始めたきっかけというのは、早く家から出たかったからです。姉がいて、男は私 1 人だったのですが、母が「息子は大切なので、外に出るな」、「山にはいっちゃダメ。危険だから」と言っていました。夏に友達と水辺に行ってキャンプをしようとしても「水は危ない。危険だ」と。息子ということで母にそこまで可愛がられ、保護する思いからそうされたので自分は家が嫌になり、また姉だけだったので「男の世界」に入りたいと思いました。

当初、自分の思っていた演劇人というのは、旅回りをし、先輩たちの下着を洗ったりする世界なのだろうと思っていました。ところがそうではありませんでした。演劇の世界に入るととても面白かった。演劇が面白いというよりは、演劇をやっている人たちが、です。先輩たちを見ていても、正常な人は誰1人いない。おかしな人がいっぱいいたんですが、それが自分にとってはとても面白くて、「世の中にはこんなに面白い人が大勢いるんだ」と思い、続けることになりました。10年くらいそういう形でずっと続けていましたが、一緒にやっている人たちはどんどん売れていく中、私は全然ダメで、能力がないんだと思いました。何よりも私自身が誠実ではない。じゃあ自分でやろうと思ってやりだしたのですが、お金もないので借りたり、それを返すために母の引き出しからちょっと拝借したりなどということをしていました。

そのうち、このような状態ではもうダメだと思い、これで最後にしようという想いでやったのが、昨年テクストで使用した『青春礼讃』です。まさかそれが売れるとは思っていなかったのですが。それで気分がよくなってしまい、今に至ります。

こういう話から始めて何なのですが、今こういう風にお話しすることによって、自分がやってきたこと、また自分自身も反省もして、新しい気持ちで進めていきたいと思っています。ちょっと説明が長かったですか。

日本とこうやって縁があって1年に何回か来るようになってきているんですが、すごく日本が好きです。その理由はいろいろありますが、1番大きな理由が、居酒屋で煙草が吸える。以上です。

では、最初の方からお願いします。

■1人ずつ自己紹介が始まる。

○ **パ　ク**　（中盤あたりで）こうやって自己紹介をしている間に多分今日は終わってしまうでしょう。でも、いいですよね。私たちがやろうとしている演劇というのは、本来独りではできないもの、皆で一緒にやるものなので、短い時間ですが、言葉でどのような人か、喋っている姿とか、そういうものを見ながら私たち自身も感じることができると思うので、演じる時間も大事ですが、やはり最後まで皆さんのお話を聴きたいと思います。

再開する前に少し演出の話をさせて頂きます。今ここに演出だけをされるという方が7名いらっしゃって、演出兼俳優をされる方がもっとたくさんいらっしゃる。私は、演出はいなくてもよいと考えることもあります。例えば、10人くらい出てくる作品で、演出家が 1人いる。演出家

の持っている創造する考え方だとかはもちろんあると思います。ですが、10 名のキャストの中で、演出家 1 人の意見ももちろん大切ですが、それ以上にそれぞれの俳優が持っている考え方というのがあって、それを合わせたらもっと素晴らしいものになる場合もあると私は思っています。ですから、俳優をされている人というのは演出ができなくて俳優をしているというわけではなく、「俳優という仕事のほうが自分はやりたい」と選ぶ気持ちの中でやっていると思います。結論から言うと、演出というのは上手い演出をするということではなく、その中で生みだしていく力を持っている人だと思っています。

しかし演出という経験が浅くて、ある人によっては俳優よりも勝っていたいとか、俳優を抑圧してしまう演出家もたくさんいると思います。そういう場合、俳優はそこで傷つけられたり、モチベーションが下がってしまうこともあります。そのようになった俳優というのは、閉じてしまって、作品の中で自分の身体を通して出したいもの・持っていたもの・できるものというのができなくなって、ただ心を閉じてしまうことになってしまう。俳優というのは、演出家や皆が創りたいと思っている作品を、その身体を通して観客に伝えものです。ですから、演出家は正直なほうがいいと思います。どうしたらよいか分からない部分は俳優に訊いてしまうこと、もちろん質問はただ無責任に投げかけるのではなくて、演出家の中で、その計算もなくてはいけないものだと思います。質問に対して責任を取れるということです。もちろん演出家は台本をたくさん読んでいます。ですが、俳優もいっぱい読んでいるわけで、その俳優の意見を取り入れることができるというのが演出の力であると思います。俳優が出してきたアイデアを受け入れて、「それはいいね」と言って刺激してあげることによって、俳優は自分が演じるというだけでなく、それ以上のことをその座組の中で常に考えるようになります。俳優が「演出家は自分のことを信じてくれている」という風に思ったときにこそ俳優はびっくりするくらいの力を発揮すると思います。例えば俳優が疲れています。「じゃあいいよ、1 日休めば」ではなくて、演出家はその俳優の悩みを聞いてあげなければいけない。作品に対する悩みではなくても、家で何があったのか、そういうことも聞いてあげて、「そうか、じゃあどうすればいいかな」、「何かできることはあるか？」だったりとか、お酒もご馳走してあげて、ご飯も食べさせてあげて、そうすれば俳優は信じます。「この演出家は自分のことを信じてくれているんだな」、「ご飯もたべさせてくれるし」とか。俳優同士の仲が悪かったら、仲介に入ってあげます。そういう風にしていたら、今やっている作品が上手くいかなかったとしても、そのチームで次の作品をその演出家とやるときにはびっくりするくらい良いものになる。もちろん演出家が作品を上手く創れないこともあります。でもやっていると良くなってきますよね。演出家が俳優を信じます。俳優が演出家のことを信じてくれているんだという風になることこそが、いいものを創っていけることなのだと思います。

韓国の俳優たちも、日本の演出家と何人か出会ったりしていますが、野田秀樹さんのことはすごく好きなんですね。演出家としての才能も素晴らしいと言っていることもあるのですが、稽古

期間に、3 か月の間ですけれども、その間に野田さんの心とか、人との接し方とかというのにも、韓国の俳優たちは皆、感銘を受けています。

少し話し始めてしまいましたが、演出についてという話も最後の日に皆さんと話ができればと思っています。（次の人に）お待たせしました。

■後半の自己紹介が進む。

○　**パ　ク**　皆さんお話されましたよね。

■ここで名簿の中から演出希望者を５名選出する。

○　**パ　ク**　ではチームを作りたいと思います。1 チーム 6 人ですね。先ほど男性 2 名、女性 6 名と言っていたのですが、運に任せます。どういう配分になっても構いません。

では、5 分お渡ししますので、5 名の方はプレゼンテーションをしてください。「こういう団体を作ります」という形で、皆が入れるように。（他の参加者に）プレゼンをしてもらったら、ここに入りたいというところに手を挙げてください。時間がないので、プレゼンタイムは 1 人 2 分にします。その中で「自分の劇団はこんな劇団だよ」と勧誘をしてください。

（欠席者を除くと）今 26 人の俳優がいます。では椅子を最初の状態に戻しましょう。5 人の演出家は準備をして。順番はジャンケンで決めましょう。

■演出家によるプレゼンテーションが行われる。

○　**パ　ク**　皆さん、5 人のプレゼンテーションはしっかりお聴きになりましたね。5 名の方は、（空間の）角に立ってください。

5 名が 3 チーム、ひとつのところは 6 名になります。好きなところに行ってもらうので差が出るかもしれませんが、その辺りはそれぞれの忖度で。知り合いだったり、楽な関係性もあるかもしれませんが、それはなるべく固まらないようにしてください。

■チームを決定する。

○　**パ　ク**　時間がないのですが、今皆さんで話してもらって、明日、もう発表します。何をどういう風にするかというのを各チーム全員で相談してください。今ここで話し合う時間はないと

思うので、連絡先をやりとりしてもらって、今日の夜中の時間に何をするか話し合ってください。

　もうひとつ。3 分以内のものにします。それ以上にならない。台詞も覚えないでいいです。何か使うなら使ってください。覚えてもいいです。理解できましたか？　どういうことをするかだけ決めて、例えば明日に関しては、即興でやるのもよいと思います。難しく考えないでください。宿題だとも思わないで。状況だけ決めて、即興でやってみるというのもあるので、明日やってみたら 2 回目はすごく楽になると思います。やりながら、会話をして進めていきたいと思います。

○　**参 加 者**　発表の時間帯は決まっていますか？

○　**パ　ク**　来てすぐです。（反応をみて）それだと可哀そうなので、10 分だけあげます。ご自由に、演出家も一緒に出てもいいですし、演出だけでもいいです。ではまた明日。

ワークショップ 2 日目
8 月 23 日（木）

●台風 20 号接近の影響につき、この日は開催を中止。参加者には以下のメールを送信。
……

WS 受講者の皆様
18 時よりピッコロシアター中ホールにて開催予定のワークショップですが、台風 20 号の接近に伴う交通機関の運休を鑑み、本日は休講とさせて頂きます。
何卒ご容赦くださいませ。
この代替としまして、以下の日程における開講時間の増設をご案内致します。
・ 8 月 25 日(土)13：00 ～20：45 → 10：00 ～20：45
・ 8 月 26 日(日)13：00 ～20：45 → 10：00 ～20：45

なにぶん急な変更ですので、皆様のご都合もあろうかと存じます。
この増設時間における参加・不参加の確認は、明日 24 日(金)の受付時にお知らせくださいませ。
……

●その後、パク氏の提案により以下の内容を追加で送信。

……

WS 受講者の皆様
度々失礼致します。
本日の WS 休講に伴い、講師の朴先生より追加課題告知のご依頼がありましたのでお知らせ致します。
《追加課題》本日発表する予定だった小品に加え、もうひとパターン用意してください。
つまりは、明日の WS 内で各チーム 2 作品を披露して頂くことになります。慌ただしくなるかとは存じますが、折角の機会です。目一杯楽しみながら取り組んで頂ければ幸いです。

では明日、どうぞ宜しくお願い致します。

ワークショップ 3 日目
8 月 24 日（金）18：00～20：45

○　**パ　ク**　皆さん、昨日はいろいろあってもう 1 シーン作るよう追加で連絡を入れたのですが、大丈夫ですか？　私は講師という立場でここに立っているんですけど、それぞれ皆さんが演技されて、演出されてという中で、これが必ず正解なんだというものは存在しないと思っています。それぞれに趣向があって、好きな食べ物、好きな服とかがあるように、演技・演出に関してもそれぞれの好むものが必ずあると思います。だから、これが正しい、これがダメということではないです。お互い話をしていくという時間だと思ってください。簡単に言うと、それぞれが抱えている悩みをみんなで相談する時間だと思ってください。自分が、どうしたらいいのか、こうなのかと悩んでいることをここでさらけ出して頂いて、お互いにその解決方法を探していく時間だと思ってください。私たちが思っている共通点というのは、同じ空間に、同じ時間軸で今ここにいるということだと思います。もちろんここには私自身よりも先に生まれた方もいらっしゃいますし、私よりもずっと後に生まれた若い方もいらっしゃいます。でも、私たちは共通点を持っているんです。昨日同じように台風というものを経験しました。分かり易い共通点としてはさっき言ったように台風があって、今この時間

軸で、今私たちがこの空間にいるのだけれど、それ以外にそれぞれの人生の中で悩んでいるものや、いろんなものがあると思います。そこにももしかしたら共通点があるかもしれない。そういうのを、分かち合える時間だという風に考えてください。

ではこれから始めたいと思います。各代表がジャンケンをして頂いて順番を決めますね。今、ふたつのテーマでお願いしていると思いますが、まずひとつのテーマを 5 チーム全部で、ずっと行きます。それで、ひとつのテーマを順番に発表したら、その後にチームが「こういうことを表現しました」と述べて、それを見ていた私たちがそれに対して感じたことを話します。そして次のチームに行きます。という形で進めますね。

■代表者（演出）によるジャンケンでそれぞれ順番が決まる。

■１チーム目の上演

終了後、代表者による作品解説。

○　**パ　ク**　（観客に）どうでしたか、観ていた方は。（チームに）最初だから緊張したんじゃないですか？　では皆さんに意見を聞きましょう。こういう形で進めますので。質問もなんでも含めて、どうぞ。

■観客からの感想および意見交換

以下、個々の試演内容に関するやり取りは省略する。

○　**パ　ク**　最初だから皆さんいいことばかり言いますね。会えない時間の中でよく作られたと思います。

私から見た感想ですが、みんながずっと喋って、散漫になってしまいましたね。もちろん経験の少ない多いはあると思いますが、やはりいい演じ方というのは、自分ではなくて他人が何かをされているところに注目させてあげる、こっちもそれを支える。それを俳優同士がやればすなわち観客もその分視線がいきます。

特にやることがないときは、何もしなくていいです。何かをしている人をじっと見て立っていればいいと思うし、何かをし続けるということは集中力が散漫になってしまうと思います。もちろん今回、短い時間でいきなりやってもらっているのですが、もしかしたらこの先、もっと短い時間ですぐやれと言われることもあるかもしれません。

全員が話すと、観客がどこを見ればいいのか分からなくなってしまう。もちろん俳優は身体や声を訓練しなければいけませんが、何か特別にしなきゃいけないということがない場合は、（身体を示し）このようにただ立つということをしなければならないと思います。映画や演劇を観るときは皆さんそうだと思うんですが、「この人は今何を考えているんだろう」という部分が気になると思います。その、何を考えているか知らない、解らないけれど、しかし何かを頭の中で考えていなければいけないと思います。その考えがどういうものか分からないし、台詞として喋るかそうでないかも分からない。だけどそれを説明する表現に走ると、観ている人が気にかかっていることがなくなってしまいますよね。心の引っ掛かりがなくなってしまいます。

声や身体の訓練のことをちょっと言ってしまいましたが、普段の生活の中で（実際に歩きながら）人を見ることが大切だと思います。ああ、この人はこんな感じなんだなぁとか。今みたいに。普段から耳と目を開いてください。「あぁ、アイツはこんな感じだなぁ、あんな感じだなぁ」と、酔っぱらう直前までこれをしてください。毎日呑みながらも。なぜなら、私たちが表現しようとしている人、表現するべき人は、私たちと一緒に暮らしている人間なんですから。私たち自身もそうです。

観察が大切です。（チームに）お疲れ様です。

■２チーム目の上演

終了後、代表者による作品解説及び会場内の全員でディスカッション。

○　**パ　ク**　音楽を実際に流すか流さないか。演出の選択肢の部分ですが、いろいろな演出家が大いに悩むポイントのひとつです。そういうときは、俳優に訊けばいいと思います。一緒にやっている俳優に、ここでこういう風に音楽を使いたいのだけどどう思う？　と。そうしたらまずはやってみて、その後、俳優がどう思ったか。なしでやってみようと言うなら、それも試してみるという形で。俳優も、俳優がやりやすい方法があって、それを演出が見て判断していけばいいと思います。演出家の観点としては、芸術的な観点を必ず持たなければならない部分だと思うんですね。それは大変必要です。だけど絶対に忘れてはいけないのは《観客の視点》です。

最初に言いましたが、演出家がこうしたいと言って演出をした。そのときにスタッフだったり俳優だったりが違う意見を提案してくれて、そっちのほうがよかったとき、そういうときは「なに？　俺が演出なのに」なんて思うことは全然ないです。演出なんていなくていいんです。俳優がいれば。俳優がよくやって、観客がそれを観ていて、もちろん演出家の視点とか芸術的側面と

いうのは大切ではあるけれど、観客に伝わることが１番です。そしてその観客と目の前で対峙している俳優がとても大切だと思います。

　それでですね、こうやって（身体を動かし）歌い踊りながら、たぶんこれからも作品の中でこういうシーンに出会うことがあると思うのですが、また演出家もそういう作品を演出することもあると思います。俳優が嬉しい、楽しいと言ってこうやって踊っています。ですが、観客から見て「え？　別に何も楽しくないけど」みたいな。でも俳優はそれを続けている。そういうときは変えなきゃいけない。何が言いたいかというと、この楽しそうな雰囲気が観客にもワクワクが伝わっていればいいんですが、観客が観ながら「最初ちょっと楽しそうだったけど、1 分もやってててつまんないんです」というようになると、観客の気持ちは離れます。観客の気持ちが離れたら「最初ちょっと楽しそうだったけど、1 分もやってててつまんないんです」というようになると、観客の気持ちは離れます。観客の気持ちが離れたら、もちろん俳優は演出家と練習しているんですが、「(怒って）なんだよ、こんなの全然面白くないぞ！」とある俳優が言えば、「もういい、踊らなくていい！　呑みに行こう」ということになります。例えば今のシーンでもそういう風になる可能性はあるわけじゃないですか、周りが楽しんでなかったら。何が言いたいかというと、観客の気持ちは離れているのに、私たちだけでやっていると、観客は時計見て携帯を見始めます。今あなたたちがそうだと言ってるのではありませんよ。そういうシーンをやって盛り上がりたい場合は観客も一緒に連れていかなければいけない。いくら演じている人が楽しくても、観客がつまらなかったらもう終わりです。ですが観客におべっかを使えというわけではないです。
またこういった話も後でしますね。お疲れ様でした。

■３チーム目の上演

終了後、代表者による作品解説及び会場内の全員でディスカッション。

○　**パ　ク**　集中力を感じました。上手い下手ということではなくて、人々を惹き込んでいく吸引力のようなものです。さっきも言いましたが、日常生活で皆さんも絶対そういうのがあると思うんですよね。何だか惹き込まれる、惹き付けられるようなことが。そういうものがあると思うし、探されるとよいと思います。どうしても舞台上では何かを表現しなければとか、何かをし続けなければという風になってしまうのですが、それにはやはり限界があると思います。立って、ただ何かを考えているだけでもどんどん人を惹き付けられるのに、そうしても何かをしなきゃしなきゃと表現に走ってしまうというのが大きな罠になっていると思います。

　作品によっていろいろあると思います。最初は何も起きず、静かに進んでいるのが、ある時いきなりワーッと惹き込まれていく。それはその前にジャブがあることもあります。でもそうではなく最初から興味津々に観客を引っ張っていこうとする作品もあります。そのやり方というのは

演出の選択に入っていると思います。自分がやること、自分ができる行動、そしてそれをただ考えている、それだけで存在することはできると思います。お疲れ様でした。

■ 4 チーム目・5 チーム目の上演

終了後、代表者による作品解説及び会場内の全員でディスカッション。

○ **パ　ク**　私自身も説明が足りなかったかもしれませんが、お渡ししたテクストは、あくまでも参考でよいです。そこから派生する物語とか、全然違うところの人物を登場させたりですとか、言ってしまえば全く関係ない話でもよいです。

台本に関して少しお話しをしましょう。この中で大統領が監獄に入っている話が出てきます。2009 年の盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領が亡くなった日を書いています。韓国の人が読むとすぐ解るのですが、取材が来たときにはいつもこう言っています。「私はハロルド・ピンターが好きで、自分で書いておきながらも、ピンターの匂いがするものだと思っています」と。皆さんに配布したテクストは翻訳されている状態で渡されているので、どのように伝わっているか分からないのですが。

まあ、皆さんとりあえずやってみました。3 分と言っていたのですが、ちょっと長かったですね。次の発表に進みますが、今から 10 分間、皆さんに時間をお渡しします。2 作目は、長くても 5 分以内にしてください。順番は先ほどと同じにしましょう。

■ 10 分のミーティング時間

■ 1 チーム目の上演

終了後、代表者による作品解説及び会場内の全員でディスカッション。

○ **パ　ク**　（出演者全員が黒いポリ袋を身に纏っていたのを受け）先ほど、他のチームのところでカラオケの話が出ましたが、この上演の中で重要なポイントがあります。みんなが「この黒い袋は何なんだ？」と気になっていたと思うんです。舞台上で、誰かが訊きましたよね、「これは何ですか？」と。もちろん作家がそのように本を書いていればそれでいいんですが、例えば演出においても、作品をやるときには観客がずっと気になっていることを、舞台上の人がオープンにしてあげればいいんです。もっと言えば、これ何？と観客の代弁をしてくれたことに対して、先ほどディスカッションの中で仰っていた「ニオイがある。それが重たい空気となって個々の中に絡みついている」というようなことを舞台上で言ってくれれば今度は観客席と舞台上で一気に共有できるものが出来上がります。もちろん推理ものやミステリーものだと、ずっとそれをひっかけておいて最後に解答していくこともありますが、今みたいなパターンで一緒にやって解答まで

してくれると、ここ（舞台上）も一緒に観客も一緒に共有・共感する時間ができる。例えば舞台上で俳優が「ニオイだとか言ったってうるさいし、邪魔じゃないの？」と一言発することによって、観客の中にもそれを思っている人がいたかもしれないですよね。そこで演出家が「だってそんなこと言ったってコレしかないじゃないか。金もないんだし、その辺りから盗ってきたんだよ」とか、そういうことを言うことによって、客席との壁がなくなる。

とてもいいケースを見せてくれたと思います。今みたいな形で、例えば実際にお金がなくていろんなものが足りず代替品を使ったりということもあると思うんですけど、そのような物を使うことによってまた客席との引っ掛かりも変わってくるし、それに対する答えまで舞台上で言ってくれると、それを論理的に説明してもよいのですが、あるときにはユーモアを持って話をすることで観客との距離も縮まると思います。

先ほどの自己紹介で脚本を書かれる人がいらっしゃいましたが、例えば書くときに、自分だけで書いて一人だけ読ませてというのではなくて、朗読会をしてみてください。朗読発表のようなことをして、そこで「アンケートに何か意見を書いてください」ではなくて、聴いてくれた人たち全員を連れて、飲み屋に行って奢ってあげてください、お酒を。アンケートなんていいようにしか書かないので。正直に書きません。飲んだら「何だよアレ！」みたいなことを言ってきますから。

観客が気になることを、作家が先に開いてあげる。皆さんはどうか分かりませんが、私は観ていて「なんで？」となっているのがずっと続くと、ついていけなくなるんですよね。だから、「これしかないからこれにしたんだ」っていう形でオープンにしていってくれるといいと思います。

■２チーム目の上演

終了後、代表者による作品解説及び会場内の全員でディスカッション。

○　**パ　ク**　いろいろ話したいのですが時間がないのでここまでにします。お疲れ様です。

■３チーム目の上演

終了後、代表者による作品解説及び会場内の全員でディスカッション。

○　**パ　ク**　今の作品は、何も決めずにその場で代表が質問を投げかけて、それに対して話したというスタイルですね。皆さんがどう見たかは分かりませんが、私はすごく新鮮な演劇を観たよ

うな気がします。観ながら、内容というよりは言葉について考えたんですが、皆さん俳優は台本を見ますよね。台本というのは結局、言葉を文字にしているものですよね。その文字を見て、文字にうっかり騙されてしまうと言葉ではなくなってしまいます。ですが今の皆さんはとても自然で、文字ではなく言葉を発していたと思います。皆さんが「両親について語る」というテーマで、それぞれの想いや記憶を持って、それを言葉にする。

台本をもらったとき、それは飽くまでも稽古なんです。練習用だと思って、それを踏まえた上で「言葉」にしていってあげる。言葉って、もちろん単語と単語が繋がっていって文章になっていって、それが伝えるものになっていくんですが、日常生活は実際にそうではなくて、言葉と言葉の間には「間」があったり、その中には絶対に「呼吸」というものがあると思います。ほとんどが、どうしても台本を持って稽古となると、単語だけを連ねて「文章」になってしまう。それぞれがそれぞれに、いろいろな思考があるし声色なんて全然違うわけで、それぞれが台本を持って、自分の音色で、自分のもので、自分として表現をするのが１番ではないかと思います。もちろんいろいろあると思います。日本にしろ西洋にしろ、特殊な古典をやる場合はまた違うし、大きな劇場になったらボリュームも変えなければいけませんが、そのときでも大切なのが「観客に伝わる」ということなんですよね。観客に伝わるためにボリュームが上がったりしますけれど、やはり根底にあるのは一緒で、今拝見したものというのは何の練習もない、そのままのものだったので、そういうことが延長戦にあるだけだと思います。

私たちが公演するときは、招待だったり有料チケットであっても、とにかく観に来ます。私たちはただするだけなんです。何をするか？　私たちの想い・考え、それを自分たちの言葉で。それが例えば自分たちの中に考えもなく、ただやらなきゃいけないことをやっているだけだと全く惹き込まれません。観客たちが見たいのは、俳優たちがどういう考えを持って、その考えをどういう風に表現するのかということが気になっているのだと思います。

当たり前のことですが、ここにいるみんな違いますよね。自分をちゃんと見れるのは自分しかいません。でも私たちは、誰かのようにしようとしてしまいます。どれだけ人の真似をしても、そういう風にはなれないんです。ただ残るのは「変なモノ」です。（身体を示し）この中に全部あります。正直に自分が喋りたいときは喋る、喋りたくなかったらそのことを考えていて、そのときが来たら喋る。それでいいと思います。

■４・５チーム目の上演

終了後、代表者による作品解説。

○　**パ　ク**　最後の２チームの討論ができなかったので、明日、集まったらそこから始めたいと思います。

・明日のスケジュールを予告して終了

続き、詳細は、
国際演劇交流セミナー2017-2018 年鑑にて

国際演劇交流セミナー2017-2018

――― 年　鑑 ―――

■　目　次　Index　■

2017

デンマーク特集　－ ワークショップ・リーディング・シンポジウム　・・・・・・・・・・・・ 1
韓国特集　－ ワークショップ・レクチャー・シンポジウム －・・・・・・・・・・・・・・・・21
インドネシア特集　－ ワークショップ・レクチャー －・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
フランス特集　－ ワークショップ・シンポジウム －　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93

2018

台湾特集　－ ワークショップ・レクチャー・シンポジウム －・・・・・・・・・・・・・・・131
韓国特集　－ ワークショップ －　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・151
スイス特集　－ ワークショップ －　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181
アルゼンチン特集　－ ワークショップ・レクチャー・シンポジウム－ ・・・・・・・・・・・199
国際演劇交流セミナー実施年表【1999 年～2016 年】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・241

ご希望の方は、日本演出者協会 事務局までご連絡ください。
TEL : 03-5909-3074 ／ FAX : 03-5909-3075
E-mail : j_d_a_info@yahoo.co.jp